

二次元ぷち文庫

陸軍大尉



赤坂葉子

屈辱の変態撮影会

岩重十郎太

表紙イラスト：鈴音れな

試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『陸軍大尉赤坂葉子 屈辱の変態撮影会』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



陸軍大尉

☆☆☆

赤坂葉子

屈辱の変態撮影会

岩重十郎太

表紙 / 鈴音れな

登場人物紹介

Characters

あかさかようこ

赤坂葉子

『南亜の蒼い防壁』の異名を取る女将校。非科学技術テロ阻止の任務に携わる。

K106

陸軍省に犯行声明を送りつけたテロリスト。葉子を狙う。

陸軍大尉・赤坂葉子は雑居ビルの六階、鉄の扉の脇に身を潜めた。

長めの黒髪をポニーテールにまとめ、生来の抑揚に乏しい表情を緊迫に引き締めたのは、汚灰色の壁の前に理知的な美貌を水際立てた女性将校である。

室内の気配を探ろうと長身を締め廊下に膝をつくとき、明灰色のタイトスカートから伸びる黒いオーバーニータイツに透けた腿の肉感が強調され、廢れた鉄筋に華やかな異彩を放った。両脚の黒と鮮やかな黒髪とが明灰色の軍服との鮮やかなコントラストを作っていて、二十六になる峻厳な陸軍軍人を色彩的にも引き締めていた。

今は白昼、春の太陽がそろそろ天頂より傾き始めた頃である。ビルの最上階は一部屋しかないらしく、通路にたった一つだけ閉じられた扉は寂しげに沈黙していた。

本来ならば、そろそろ本省に到着していなければならない時間だった。昨日『K106』と呼ばれるテロリストから不敵にも届けられた犯行声明について、関係各局と午後から協議に入る予定だったからである。

それは、このたび政治家が突然自殺した事件は自らが起こしたテロである、という陸軍省だけにあてられた大胆極まる声明文書であった。それが単なる冗談と片づけられなかったのは、直前の予告とセットになっていたからでもあったし、すでに三件目だったからでもある。

近頃要人に自殺が続くことはマスコミも訝しんではいたが、テロと嗅ぎつけられればと

んでもない事態になる。送りつけられた声明は極秘扱いとされ、政府の限られた一部だけが知る機密事項とされていた。『K106』は昨今最も重大なテロリストと目されていたのである。

にもかかわらずその限られた一部に属する赤坂葉子大尉は、登庁途上、車を置いて閑散としたビルに上っていた。

平日だというのに、辺りは奇妙に静かだ。それは実態の乏しいダミー会社がひしめくこの建物では当然の事かもしれないが、一方で、嵐の前触れの様でもあった。

扉の向こうにはテロリストの一味が屯している。この界限で、車上からふと彷徨させた視線が、人ごみの中から鋭く犯罪者の顔を見分けたのは、常在戦場の精神を透徹させた大尉ならではの功績だった。

男は小柄だが武闘派で知られるテロリストで、犯罪者集団の幹部につき従って警護を務めていた人物だ。同集団の壊滅に伴い潜伏していたが、また新たなボスを見つけたのだろう。その背中を追跡してここに導かれたのはつい先刻の事だった。

獲物を前に、大尉は早くも突入を決断していた。

応援は要請したが、各省庁に跨がる対テロ捜査では、実際に動き始めるまでには時間を必要とする。しかし実行犯たちが権力の執行を待ってくれるとは思えないし、事実待ってくれた事は過去なかった。だからこういう場合、見敵必戦の軍人精神を發揮せねばならな

いのである。

何より、大尉は特殊なテロリストの覆滅を期待され現在の部署に抜擢された軍人であった。

即ち『対非科学技術テロ対策班』なる二軍統合幕僚統監部直属組織の先任将校であり、近年流行する新しい技法・非科学技術を用いたテロを防圧すべきこの新設部署の骨格として歴戦の勇士のキャリアを買われた陸軍随一の将校である。

折角の好機を縦割りセクトの近親憎悪的駆け引きで潰すくらいなら、譴責の一つや二つは甘んじて受ける覚悟ができていた。

唯一の不満は登庁日の規則とは言え、内勤用制服を着用している事だろうか。

濃緑色の外勤制服がパンツスタイルであるのに対し、内勤制服は明灰色を基調としたスカートスタイルである。上衣は薄くパットの入った格式的なスーツで、袖の白縁と左胸や肩に縫われた階級章がアクセントだ。膝丈のタイトスカートと白いブラウスは事務的で、とてもではないが戦闘向きではない。臙脂色のロングタイが総じて質素な軍服にあって引き立て役を演じていた。

精々週に一度しか着ないというのに運が悪かった。しかし路上で犯人の顔を見かける幸運とならば、幾らでも釣が出るだろう。

大尉は淡然と息を整えると、無防備な扉に手をかける。

「陸軍だ。全員動くな」

音なく扉を開け放つと同時に、鋭く視線を巡らせながら、威圧的だが透通る声を放つ。室内は応接室というべきか小ぢんまりとしていて、大凡おおよそ八畳の空間に大振りのテーブルが一つとパイプ椅子が五、六放られている。不衛生な雰囲気も相俟つて、否応なく用心棒の溜まり場を連想させた。

ここへ案内してくれた小男と、手配書で見た事のあるやはり武闘派の大男とが、それぞれ右と左の壁際で弾ける様に顔を上げる。その表情から虚を突かれたのは明らかだ。

大尉が跳ぶように躍進して、景色が動き出した。

長方形の白い壁を後景に流しながら、女軍人が身体を弾ませる。

まるで一瞬にして距離を詰めたかの様に迅く、大男の懐に飛び込む。慌てて赤い炎に似た陽炎Ⅱ『ファイアブロウ』を大きな右手に練り上げる機先を制して手首を蹴り飛ばすと、一連の動作で顎先を刈る。手応えそのままに大男の凶体が音なく背から壁へ凭れていく。その有様を確認するまでもなく、大尉は次の獲物を求めて重厚なテーブルの上へ舞い跳んでいた。

小さな着地音が室内に満ちる。漸く景色が止まる。連続する運動に息も切らさず、一人の軍人が部屋の空気を支配する。

全ては決していた。喧噪の一つもないままに、狩猟は終わろうとしている。

タイト・スカートの片膝を衝いた戦闘兵器の目の前、中腰のまま射竦められた小男が辛うじて呟いた。

「……お前が。『南亜の蒼い防壁』が現れるなんて聞いてねえよ……」

悔恨の呟きを聞き捨て、疾風の一撃を小男に加え、肉体は軀の如く壁に凭れる。そして大尉は無力化された二人には最早興味を失って、直ぐに奥へと続く白い扉に視線を向け直した。

陸軍大尉・赤坂葉子は応接室から奥へと続く扉のノブに手をかけると、一度両の眼を瞑って壁の向こうを気取った。

薄い扉越しには静寂の気配が伝わってくる。そこには忌むべき殺意や何らかの非科学技術反応なども感ぜられない。

(少なくともトラップはなさそうだ)

非科学技術が世界に浸透して以来、テロは本当に容易になった。長く迷信と信じられていた手段——呪殺や殺人魔法光線を駆使する者まで出てきては既存の警備システムでは歯が立たないのも当然だ。一時期は非科学技術テロが世界を席卷したものだった。

だが漸く護る側も技術の新展開に追いつき始めた。非科学技術を用いる際には特定の気配や反応がある事も解明されたし、逆に非科学技術を用いて警護する者も出始めた。

【いいケツだねえ、引き締まって色もいいし、……感度もいいし？】

(……！ やはり完全に、見抜かれている……ッ)

異常な環境で、普段の自分の絶対に秘匿すべき行為を暴露する、異様な行為に脳が茹だる。くらりと意識が傾いでいきそうな、極彩色の感情が脳を満たしていかうとする。

「そ、それじゃ始めるから、私の密かな趣味、ケツ穴オナニー……！」

上気した白痴顔をだらしなく晒して、上擦った声で宣言する。趣味などではない、と声なき声を上げようとして、同時、右の中指が尻穴に触れた。

「……んんッ……！」

(……う、何？ お尻の穴がネットリして、まるで……)

【クク、腸汁をちよつと漏らしてあげたんだよ。やり易いだろ？】

(『K106』う……!!)

ヌポリ、中指が何等の抵抗もなく尻穴に沈んでいく。忽ち第一関節まで飲み込まれて、ゾワリ、妖しいが慣れ親しんだ性感が脊髓を脳へと駆けた。

「……ん、あ、いい、かも……ッ！」

【へえ、いいんだ。流石普段から使ってる場所は違うねえ】

(う、煩い……！)

中指をクルクル廻して、浅く出し入れして、そのたび形を変える尻穴がゾクリゾクリと

性感を生み出す。おそらくは勝手に、細腰からヒップへ円に揺らしてしまつて、前傾した上体から垂れた双乳もゆらゆら揺れた。

「……ん、ん、……お、おお、撮られてるせいとか、何時もより……！」

【ほう、やはり大尉殿は撮られてると燃えるタイプ】
（ち、違う、これは貴様に操られているせいで……ッ）

とつくにこなれた後穴は溢れる腸汁に助けられて余計にほぐれ、簡単に第二関節までを受け入れる。手持無沙汰に人差し指が肛門の襞をカリカリして、棘のある性感が下半身全体を痺れさせる。咄嗟かどうか、左手が腿をついて崩れそうな身体を支えた。

「ああ、ケツ穴ホジッているところ、アップで映ってる……！」

横目でモニタを視界に入れながら、指の抽送を速めていく。美貌を下品に貶める半開きの唇と、剥き出しの舌から、涎がデロデロ床へ伝つていく。何もかもがモニタに映し出されて、猥雑に墮落した自分を見ると、無性に頭に血が昇る。

「ダメ、指一本では物足りない……ッ！」

ヌプリ、人差し指を振る様に挿し入れて、ビクビク身体が痙攣する。

ピクピクピク、淫汁を前穴から噴き出しながら、女軍人の肢体がうねる。

二本の指をクロスさせてえげつなく尻穴をグルグル穿りながら、淫汁を腿からタイツまで滴らせ、少しずつガニ股に開いていく両脚のままに、身体は殆ど中腰に落ちた。

「ん、おお、ケツ穴オナニー、最高お……!!」

自分の有り得ない嬌声を聞かされながら、自らの感覚世界が急速に収束していく。カメラも、テロリストも、存在は遠巻きになり、ただ尻穴を中心に燃え盛る性感ばかりが身近に感ぜられる。

(良くない、良くないが、……ッ!)

これは絶対に悪い兆候だ。最早激しく動く指が本当に篡奪されたせいなのか、確信を持ってないのだ。

「今までで一番、今が一番、気持ちイイい! 三本いけそおお!!」

グチャグチャに腸液を滴らせた尻穴に薬指を突っ込むと、グポリ、醜悪な淫音とともに呆気なく指を咥え込む。そして手首に捻りを加えた途端、鈍器に打たれた様な重苦しい快楽に下腹部が襲われて、女軍人の身体が弓に反った。

「お、おお、お! 三本、キクうう!」

(くう、こ、こんなオナニーした事がない……! どうして、こんなに……ッ!)

「んおッ! んおおッ! ヤバいのくる! キちやいそおお!」

(ああ、くうん! ケツ穴! ケツ穴だけで、イキそお……ッ!)

グポグポ、異様な粘音をさせて、異常なグラインドでケツを振って、女軍人が絶頂へ昇っていく。

「ん！ んんう！ ケツ穴ズポズポ、イイい……………！ んッ！ 腸汁ドロドロ出てくるせいで、音が凄いいい！ エロ音を収録されるう！」

（ダメ、ダメだ、ケツ穴、最高すぎるうう……………ッ!!）

「おおおお！ イク！ イク！ ケツ穴で、カメラの前で、イク！ イクうううッ!!」
目の前が白く弾けて、ガクガク憑かれた様に身体を震わせて、絶頂を極める。

眼球を見開き白目を晒して、殆どM字に開脚した肉体から淫汁と腸汁を撒き散らして、咆哮を一際、それから二秒、五秒、身体をカクカクと揺すった。

「……………あ、あ……………すごお、い……………」

（ケツ穴で、…………ケツ穴で、オナニー、…………最高お……………）

「オナるのもいいけどさ、ハメたらもつといいとか思わない？」
虚脱した女軍人の背後、何時の間にかヤツがいた。

「……………え、……………」

朦朧とする意識を辛うじて背中に向けて、ゆっくり振り返ろうとする。だがそれよりも早く男は女軍人に手をのぼし、開脚したままの身体が顔から床へ突き倒された。

「クク、ラヴラヴなところ、見せつけてやろうぜえ？」

「……………あ、ちよ、…………ッ？」

腸汁でドロドロになった尻穴を高く突き上げたヒップごと晒してしまおう。

「おお、大尉のケツ穴、たまらない匂いだよお？」

「……う、か、嗅ぐな……」

「ムリムリ、嗅ぐね。こんな香り、嗅がなくなっちゃあ生きていけないよ」

「くう……！」

「あゝもう我慢できない、挿れるからね？」

「……ん、お……!!？」

硬直して振り返った汚物の先端が尻穴に触れてくる。それだけで身体に期待感が爆発して大尉の美貌がだらしなさを増した。

「んんッ！ ひ、拡がるう……！」

「又ボツ、ブブウウウ——ッ!!」

「んおおおおおッ！ は、入って来たあああッ!!」

「又ボツ！ ジュブ！ 又ボオオッ!!」

「あ、あひッ！ おおおんッ!! ケツ穴あああッ!!」

「ウヒ、流石は蒼い防壁ッ！ ヌルヌルのくせにやたら締まる！」

「んんんッ！ ケツ穴あ！ いっぱひいいッ!!」

「グボ、グボグボッ！ ブチュッ！ ブピッ！」

「くうん！ ツかれるのも、又けてくのも、いひいッ！ 頭ワルくなるううッ！」

だらんと垂れた舌先で床を舐めてしまいうくらいに白痴面の美貌を擦りつけ、ケツ穴を高く捧げて女軍人が喚く。激しい抽送に忽ち辺りは腸汁に染まって、甘くすえた匂いが部屋を満たしていく。

「んおッ！ おおおおお!! そんな、なッ、グリグリされたらああッ!!」

ぐりい！ ぐりりいッ!! グポオオオッ!!

「くひいッ！ ケツ穴あ！ ケツマ○コお！ ヤメ、ヤメられなくなるううッ!!」

何時も一人で弄り倒していたケツ穴でセックスしてみても、よく分からされてしまうのだ。ケツ穴にチンポを咥えると、あるべき処にあるべきものが収まった、激しい充足感を得てしまう。

ガツチリと尻肉を掴まれ、背後から突かれまわると、相手がテロリストだなどという事さえスパークする快樂信号の向こうへ遠退いていく。

「クク、好きなんだろ？ ホラ、ホラ、ケツマ○コセックスが!!」

「おおおッ！ スキッ！ スキい!! ケツマ○コセックス大好きいいッ!!」

黒髪を振り乱しアホ面で叫ぶと、脳で火花が散って加速度的に快樂が増す。変態性を露出するのがたまらなく気持ちいいのだ。

「あああんッ！ チンポサイコオおおおッ！」

顔を少しでも上げて、はつきり映る様に意識する。美貌も、それを台なしにする白痴面

も、全てをカメラに晒すのだ。

「ンホッ！ おほおオッ！ ゼンブ撮られてるうう！！ ハメラれてヨガッてるとこゼンブ、撮られてるのおおオッ！！」

「クク、撮られるのがいいんだろ？ この変態ッ！ 変態軍人ッ！ 恥を知れッ！！」
ビクッ！ ビクンッ！

「くひい！ バレた、変態ッてバレたあアッ！ そうなのお！ 軍人のくせに変態なのよ
おお！！ ケツマ〇コにチンポぶちこまれてるとこを撮られてヨガリまくる変態なのよおお
ッ！ 悪いッ!? 悪いのおお！！ あんンッ、激しいいい！」

ヌポオ！ グボッ！ グボ、ヌポ、ズボオッ！！

「お、おおッ！ そんなッ、グボグボされたらあ！ も、もお、キチャううッ！」

「オラッ！ イけッ！ イッチまえよカメラの前でッ！！」
ぐりいいッ！！

「ンンおほッ！ イクッ！ イクウッ！！ イクイクイクうう……ッ！！」

激しく絶叫して、全身を痙攣させて、地に這い蹲った女軍人が絶頂する。

目の前が白く輝いたかと思うとグラリと傾いて、沼底へ引き摺り込まれる様な沈没感。

「……あ、……このまま…………」

奇妙な幸福感に包まれて、だが、それは鋭い打擲に切断された。

「おいホラっ、一人で満足してしまわないでくれよ、大尉殿」

背後から嘲りの声を降ろされて、二度、三度ヒップを叩かれると、意識が現実に引き戻される。幸福感が打ち消され、のしかかる様に快樂が戻ってくる。

「お、おおん、……ぶつといの、入ったままあ……」

「だから、コッチはまだなんだって」

絶頂で下がったヒップが荒く掴まれ、高い位置に戻させられる。それが更なる凌辱を予感させて、床に潰れた大尉の胸がドクリと脈打った。

「ククっ、いくぜ変態大尉!!」

ぐりゆううッ!!

「んおッほおお!! ふ、深あいいッ!!」

ぐりゆうう!! ずぼおお!!

「ひッ! うひいッ! イッたばかりのケツ穴あ! ほじられてるうううッ!!」

ぐぼっ! ずぬぼっ!

「んッ! おおん! いひい、きもちいひいひいッ!!」

「おいおい、呂律廻ってないって、大尉殿!」

「らって! らってえ、きもひいの! ケツ穴よすぎなのよろおおッ!!」

弛緩しきった美貌を晒した女軍人は上体からは完全に力が抜け落ちていくくせに、ヒッ

プだけは烈しく揺すって食欲に快楽を貪っていく。脳も機能の殆ど全てを失って、性感受信装置に墮落している。

「だらしがないぞ、『南亜の蒼い防壁』が！」

「うひい！ らって、らめえ！ ケツ穴セックスきもひよしゆぎいいいッ！！」

突かれるたびに女軍人の身体が躍る。絶頂のスパイラルに飲み込まれて、逃れる事など叶わないのだ。

「くっ、そろそろ出さず、大尉のケツマ○コに！」

「ひあう！ んひッ！ らして、らしてええ!! ケツマ○コにアツいのそそいれええ!!」

「……！ 大尉ッ！ 出してやるぞ……!!」

「くふうううう！ テロリストになからしされるなんてえ、わらしも、イツひやうううう……ッ!!」

ビュクビュクビュク!! ビクン！ ビュビクリュウウ……!!

「おおおほおおおおッ！ らされるッ！ ケツ穴にい！ テロリストのおお！ らされれイツひやうううう……ッ!!」

ビクンッ！ ガクッ！ ガクガクッ！

「イクう！ イク！ イクのおお！ イクイクイクうううう!!」

ビュリユッ！ ビュク！ ビュク、ピュク、……ッ

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>